

氏名 やま だ り え 山田理恵 教授



主な研究テーマ

- 俘虜（捕虜）生活と体育・スポーツ活動
- 日本の伝統打球戯の変容過程と文化的意義に関する研究

平成23年度の研究内容とその成果

平成23年度も主として、日本の伝統打球戯の独自性と文化的意義について研究を進めました。

特に、日本古来の伝統打球戯が、近代に入り欧米スポーツ文化の移入を背景に、学校教育のなかでどのような意図・目的でどのように行われていたのかを、前近代（近世）と近代の連続性に焦点をあてて実証的に明らかにするとともに、伝統遊戯の文化的意義について考察を行いました。また、近代の社会教育においてはどのような点であったのか、という点についても検討しました。さらに、今日まで継承されている薩摩のハマ投げについて、保存会との共催により、「第11回鹿屋体育大学学長杯破魔投げ大会」を開催するなど、地域の伝統的な身体運動文化の振興を図るための実践活動を行い、情報を発信しました。

近代に入り、欧米スポーツの移入を背景に、日本の伝統的な文化の多くは衰退しましたが、そのようななかでも継承され、定着した伝統スポーツもみられます。近代日本における伝統スポーツの実態は、前近代

と近代の連続性について考察するうえで、きわめて重要な事象であるといえます。

「ハマ」と呼ばれる木製の円盤を木の棒で打ち合う日本の民俗遊戯は、打毬から生まれたと考えられる、徒歩で毬を打ち合う毬打（毬杖）と同種の遊戯です。島津第一代忠久（1179年－1227年）の家臣たちが鎌倉で行っていた遊戯を鹿児島に伝えたことが始まりとされる薩摩のハマ投げは、薩摩藩に固有の教育組織「郷中教育」において、武芸的鍛錬も兼ねた武家の子弟の遊戯として行われていました。

その薩摩のハマ投げは、近代には、薩摩藩の教育組織を継承した鹿児島の青少年教育における男子の勇壮な遊びとして継承されました。

明治に入り、急激な欧米文化の導入と普及を背景に日本の伝統的な文化の多くが衰退していくなかで、鹿児島県では近世の身体運動文化が、近代化にともなって衰退するのではなく、近代社会の青少年教育のなかで、担い手やそれがもつ意味、形態を変えながら存続し、一時衰退をみながらも今日まで継承されてきたのです。

近代鹿児島为社会教育として継承された、薩摩藩時代における武家の子弟の教育の思想と形態—そのなかで薩摩藩の勇壮な精神と武芸的鍛錬の要素をもつハマ投げが継承され、現代へ—。このような薩摩のハマ投げの展開は、伝統スポーツの現代への適応過程の事例として、また、生涯スポーツにおける伝統スポーツの再生と発展という観点からも注目されます。

体育・スポーツ史を考察するうえで、「伝統スポーツ」は、まだまだ掘り起こし議論していく余地がのこされているテーマのひとつであり、「伝統スポーツ」を、体育・スポーツ史研究の一ジャンルとして位置づけることも可能であると考えています。そのためにも、今後さらに、日本各地で行われていた、あるいは今日まで継承されている伝統スポーツの事例を歴史的に検証し、その文化的意義や特性を明らかにする研究がなされていくことが必要であり、そのような研究が、今後の体育・スポーツ史研究

の発展に繋がるということを、薩摩のハマ投げ研究を通して発信しました。

### これからの研究の展望

今後も継続して、第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜の場合を中心に資料を整理し、ライフワークである俘虜生活とスポーツ活動についての研究を進めていくこととしております。

また、日本の伝統打球戯についても、継続して現地調査および史料調査・史料吟味を行い、伝統的身体運動文化の意義と在り方について考察するとともに、薩摩の伝統遊戯・ハマ投げの実践活動を通して、同遊戯の継承と振興に努めたいと考えております。

日本各地で行われてきた(行われていた)伝統遊戯・スポーツに関する資料・情報をお持ちの方には、資料・情報提供等ご協力賜りますようお願い申し上げます。



先頭の競技者がハマを打ったところ（第11回学長杯破魔投げ大会より：山田撮影）